

舌切りすずめ

楠山正雄

—

むかし、むかし、あるとにじろに
おじいさんとおばあさんがありま
した。

子供こどもがないものですから、おじ

いさんはすずめの子を一羽、だい
じにして、かごに入れて飼ってお
きました。

ある日おじいさんはいつものよ
うに山へしば刈りに行って、おば
あさんは井戸ばたで洗濯をしてい
ました。その洗濯に使うのりをお
ばあさんが台所へ忘れていった留
守に、すずめの子がちよろちよろ
かごから歩き出して、のりを残ら

ずなめてしまいました。

おばあさんはのりを取りとに帰かえつ

て来きますと、お皿ひらの中にはきれい

にのりがありませんでした。その

のりはみんなすずめがなめてしまっ

たことが分わかかると、いじのわるい

おばあさんはたいへんおこって、

かわいそうに、小さなすずめをつ

かまえて、むりに口をあかせなが

ら、

「この舌したがそんなわるさをしたのか。」

と言いって、はさみで舌したをちよん切ぎってしまいました。そして、

「ちゅあ、どいこへでも出ていけ。」

と言いって放はなしました。すずめは

悲かなしそうな声こえで、「いたい、いた

い。「と鳴なきながら、飛とんでいき

ました。

夕方ゆづがたになって、おじいさんはし

ばを背負^せっ^おつて、山から帰^{かえ}つて来^きて、

「ああくたびれた、すずめもおな
かがすいたろう。さあさあ、えさを
をやりましょ。」「

と言^いい言^いい、かごの前^{まえ}へ行^いつて
みますと、中にはすずめはいませ
んでした。おじいさんはおどろい
て、

「おばあさん、おばあさん、すず
めはどこへ行^いつたろう。」「

と言いますと、おばあさんは、

「すずめですか、あれはわたしの
だいじなのりをなめたから、舌を
切っ^きておい出^だしてしまいました

よ。」

とへいきな顔^{かお}をして言^いいました。

「まあ、かわいそうに。ひどいこ
とをするなあ。」

とおじいさんは言^いって、がっか
りした顔^{かお}をしていました。

おじいさんは、すずめが舌^{した}を切^き
 られてどこへ行^いったか心配^{しんぱい}でたま
 りませので、あくる日は、夜^よが
 あけるとさっそく出^でかけていきま
 した。おじいさんは道^{みち}々々、つえを
 ついて、

「舌^{した}切りすずめ、

お宿^{やど}はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ、チュウ

「ウ。」

と呼びながら、あてもなくたず

ねて歩あるきました。野のを越こえて、山

を越こえて、また野のを越こえて、山を

越こえて、大きなやぶのある所ところへ出

ました。するとやぶの中から、

「舌したき切りすずめ、

お宿やどはここよ。

チュウ、チュウ、チュウ、チュウ

「ウ。」

という声こえが聞きこえました。おじ

いさんは喜よろこんで、声こえのする方ほうへ歩ある

いていきますと、やがてやぶの陰かげ

にかわいらしい赤あかいおうちが見みえ

て、舌したを切きられたすずめが門もんをあ

けて、お迎むかえに出でていました。

「まあ、おじいさん、よくいらっ

しゃいました。」

「おお、おお、ぶじでいたかい。」

あんまりお前まえがこいしいので、た
ずねて来きましたよ。」

「まあ、それはそれは、ありがと
うございしました。さあ、どいぞう
ちらへ。」

「いっ言いってすずめはおじいさん
の手てをとって、うちの中へ案内あんないし
ました。」

すずめはおじいさんの前まえに手てを
こいて、

「おじいさん、だまっただいじなのりをなめて、申しわけがござい
ませんでした。それをおおこりも
なさらずに、ようこそたずねて下
さいました。」

と言いますと、おじいさんも、
「何なんの、わたしがいなかっただばかりに、とんだかわいそうなこと
をしました。でもこうしてまた会あわ
れたので、ほんとうにうれしい

よ。」

と言いました。

すずめはきょうだいやお友だち
のすずめを残らず集めて、おじい
さんのすきなものをたくさんごち
そうをして、おもしろい歌に合わ
せて、みんなですずめ踊りを踊っ
て見せました。おじいさんはたい
そうよろこんで、うちへ帰るのも
忘れていました。そのうちにだん

だん暗くくなつてきたものですから、
おじいさんは、

「今日きょうはお陰かげで一日いちにちおもしろかつ
た。日の暮くれないうちに、どね、

おいとまとしましよ。び。」
と言いつて、立ちたかけました。す

ずめは、
「まあ、こんなむせくるころに、
ろですすけねど、今夜こんやはいじくしまつ
ていらつしぎいましな。」

と言っいて、みんなひで引きひとめま
した。

「せまつかくまだが、おばあさんまも待まっ
ているまだまろうまつまから、今日きは帰かるまこ
とまにましまましまうま。またまたびまたびま来き
ますまよ。」

「それは残ざん念ねんでまごまいますま」と、
ではおみまやまげまをまさましまあまげますまから、
しばまらくまお待まちま下くださいましま。」
と言っいて、すまずまめまは奥おくからまつまつまづま

らを二つ持もつてきました。そして、
「おじいさん、重おもいつづらに、軽かる
いつづらです。どちらでもよろし
い方ほうをお持もち下ください。」
と言いいました。

「どうもごちそうになつたよ、お
みやげまでもらつてはすまないが、
せっかくだからもらつて歸かえりましょ
う。だがわたしは年としをとっている
し、道みちも遠とおいから、軽かるい方ほうをもらつ

てごくりと下を覗きまわすよ。」

「いい言っておじいさんは、軽い

つづらを背負わせてもらって、

「じゃあ、さようなら。また来ま

すよ。」

「お待ち申しております。ところが

気をつけてお帰り下さいませ。」

と言っ、すずめは門口までお

じいさんを送って出ました。

日が暮^くれてもおじいさんがなか
なかもどらないので、おばあさん
は、

「どこへ出かけたのだろう。」
とぶつぶつ言^いっているよじろく、
おみやげのつづらを背^せ負^おって、お
じいさんが帰^{かえ}って来^きました。

「おじいさん、今^{いま}くるまでじじい

何を^{なに}していたんですね。」

「まあ、そんなにおおこりでない

よ。今日は^{きょう}すずめのお宿^{やど}へたずね

て行^いって、たくさんごちそうになっ

たり、すずめ踊^{おど}りを見^みせてもらっ

たりした上に、このとおりっぱ

なおみやげをもらって来^きたのだ

よ。」

「いっ言^いってつづらを下^おろすと、

おばあさんは急^{あせ}ににににしながら

、ら、

「まあ、それはよろいづいしました
ねえ。いったい何がなに入はいっているの
でしよ。び。」

と言いって、ちっそくじづらのふ
たをあけますと、中から目のさめ
るような金銀きんぎんさんごぢ、宝珠ほうじゆの玉たま
が出てきました。それを見みるとお
じいさんは、とくいらしい顔かおを
て言いいました。

「ばかなおじいさん。なぜ重い方おもほうをもらってこなかったのです。その方がきつとたくさん、いいものほうが入はいっていたでしょうに。」

「まあ、そう欲よくばるものではないよ。これだけいいものが入はいっていれば、たくさんではないか。」

「どうしてたくさんなものですか。よしよし、これから行いって、わたしおもが重おもいつづらの方ほうももらってき

ます。」

と言いって、おじいさんが止とめる
のも聞きかず、あくる日の朝あさになる
まで待またれないで、すぐにうちを
とび出だしました。

もう外そとはまっ暗くらになっ
ていまし
たが、おばあさんは欲よくばっ
た一いっ心しん
でむちゃくちやにつえをつき立た
て
ながら、

「舌切したきりすずめ、

お宿^{やど}はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ、チュウ

「ウ。」

と言^いい言^いいたずねて行きました。

野^のを越^こえ、山を越^こえて、また野^のを

越^こえて、山を越^こえて、大きな竹^{たけ}や

ぶのある所^{ところ}へ来^きますと、やぶの中

から、

「舌^{したき}切りすずめ、

お宿^{やど}はここよ。

チュウ、チュウ、チュウ、チュウ

「ウ。」

という声こえがしました。おばあさ

んは「しめた。」と思っおもて、声こえの

する方ほうへ歩あるいて行きますと、舌したを

切きられたすずめがこんども門もんをあ

けて出てきました。そしてやさし

く、

「まあ、おばあさんでしたか。よ

くいらっしやいました。」

と言いって、うちの中へ案内あんないをし
ました。そして、

「まあ、どんづうお上あがり下くださいま
し。」

とおばあさんの手てを取とっておざり
しきへ上あげようとしたが、お
ばあさんは何なんだかせわしそうじきよ
ときよと見みまわしてばかりいて、
おちついで座すわろうともしませんで
した。

「いいえ、お前まえさんのぶじな顔かおを
見みればそれで用ようはすんだのだから、
もうかまっておくれない。それ
よりか早はやくおみやげをもらって、
おいとましましょう。」

いきなりおみやげのさいそくを
されたので、すずめはまあ欲よくの深ふか
いおばあさんだとあきれてしまい
ましたが、おばあさんはへいきな
顔かおで、

「まあ、早くしてト下をこよ。」

と、じねったそつに言ひしもので
すから、

「はい、はい、それではしばらく
お待ち下さいまし。今おみやげを
持ってまいりますから。」

と言つて、奥からつづづらを二つ
出してきました。

「さあ、それでは重い方と軽い方
と二つありますから、どちらでも

よろしい方ほうをお持もち下ください。」

「それはむろん、重おもい方ほうをもらっ

ていきますよ。」

と言いつなりおばあさんは、重おもい

つづらを背せ中なかにしよいああげてあ

さつもそこそこ出いていきました。

おばあさんは重おもいつづらを首しゅ尾び

よくもらったものの、それでなくっ

ても重おもいつづらが、背せ負おって歩あるい

て行くひつちらにどんどんとどんと

重おもくなつて、さすがに強情じやうじやうなおばあさんも、もう肩かたが抜ぬけて腰こしの骨ほねが折おれそうになりました。それで
も、

「重おもいだけに宝たからがよけい入はいつてい
るのだから、ほんとうに楽たのしみだ。
いったいどんなものが入はいっている
のだろう。ここらでちよいと一休ひつやす
みして、ためしに少すこしあけてみよ
う。」

「ひとりごと独り言を言いいながら、みち道ば

たの石いしの上に「どっいいしょ。」

と腰こしをかけて、つづらを下おろして、

急いそいでふたをあけてみました。

するとどっいいしょ、中を目の

くらむような金銀きんぎんさんおもごと思いの

外ほか、三みつ目小僧めこぞうだの、一ひとつ目小僧めこぞう

だの、がま入道じまひりぢ道だの、いろいろな

お化けばがによろによろ、によろによ

ろ飛とび出だして、

「この欲^{よく}ばりばばあめ。」と言^いいながら、こわい目をしてにらめつけるやら、気味^{きみ}の悪い舌^{した}を出^だして顔^{かお}をなめるやらするので、もうおばあさんは生^いきた空^{そら}はありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助^{たす}けてくれ。」

とおばあさんは金^{かな}切り声^{こえ}を上げ、一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}逃^にげ出^だしました。そ

してせつとの「とど、半分死んだ」

よひにまっ青あおになって、うちの中

にかけ込みますと、おじいさんは

びっくりにして、

「ズいした、どいした。」

と言いいました。おばあさんはい

れこれの目にあつたと話はなして、

「ああもひ、いりりだ。」と言い

いますと、おじいさんは気きの毒どくそ

いり、

「やれやれ、それはひどい目にあつたな。だからあんまりむじひなことをしたり、あんまり欲よくばつたりするものではない。」と言いいました。

底本：「日本の神話と十大昔話」

講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5

月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月

20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネット
の図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボラ
ンティアの皆さんです。